新しい実在論の理論的射程と美術の探究

The Theoretical Range of New Realism and the Inquiry in Art

小松　佳代子
KOMATSU Kayoko

橋本　大輔
HASHIMOTO Daisuke

キーワード：思弁的実在論、新しい実在論、芸術的省察による研究、行為体の実在論
Keywords：Speculative realism, New realism, Arts-based research, Agential realism

The philosophical movement of the Speculative Realism together with New Materialism has deeply influenced on art in this decade. These theories criticized the correlationism and tried to consider the possibility of the world without human-beings. This article summarized this philosophical trend in relation to art, and examined the theoretical range of it. In response to these theories we tried to rethink the possibility of the inquiry in art.

１．現代アートの動向とモノへの関心

表現やアートは1990年前後を境に大きく変容したと言われる（毛利：343）。美術で言えば表象に代わって、リレーショナルアートやアートプロジェクトに見られるように「広がりやネットワークをつくり出すことも表現の中に含まれてくる」ようになる（毛利：343）。よく知られているように、そうした動向の理論的バックボーンになっていたニコラ・ブリオーの『関係性の美学』（Bourriaud 1998）に対しては、2000年以降多くの批判が寄せられている（Bishop 2008, Rancière 2008, Helguera 2011）。アートプロジェクトに対しても、特に日本では「地域活性化」への期待と結びついて各地で行われている一方で、近年理論的批判もなされている（熊倉 2014，藤田 2016）。

リレーショナルアートにせよ、それを批判しているソーシャリーエンゲージドアートにせよ、人間相互、あるいは人間と社会との関係が主題化されるのに対して、ブリオーは近年、人新世や思弁的実在論などを思想的源泉として非人間的（nonhuman）な領域へ関心を向けている（千葉・岡嶋 2015，星野 2018）。人新世とは、大気化学者パウル・クルッツェンらが打ち出した、最終氷河期が終わるおよそ１万1700年前に始まる「完新世（Holocene）」に続く新たな地質時代の名称であり、「人間活動が地層にまで恒久的な痕跡を残すほどに地球の大気や海の組成、地形や生物圏を不可逆的に変化させるにいたった比類なき時代」（桑田 2017：122）のことである。2014年の台北ビエンナーレのステートメントでブリオーは、「人新世は、人間という種の集団的な影響力が強力で現実的になるに従って、今日の諸個人は自分の周りの現実に対して影響力を持ち得ないと感じるという逆説を示す」と述べている（Bourriaud, 2014）。このような状況において「モノと人間あるいはモノ同士の循環的な関係を問わなければならない」という問題意識が浮上している（千葉・岡嶋 2015：岡嶋 74）。

しかし星野太は、キュレーションには反映されないブリオーの一貫した関心として、アルチュセールの「出会いの唯物論」に依拠した「フォルムの理論」があることを指摘している（星野 2018）。だとすると、非人間的なモノへの関心は、哲学や社会・文化研究における「物質的転回（material turn）」という思想状況のなかで浮上してきたのだと見ることもできるだろう[1]。本論文は、このような現代アートの思想的背景となっている、新しい実在論の理論的動向を芸術との関係で追い、その議論を経た上で美術の探究を特徴づけることを目指したものである。（小松）

２．思弁的実在論・新しい実在論の理論的射程と芸術との関係性

思弁的実在論の動向は、『有限性の後で』に衝撃を受けたグレアム・ハーマンを中心に、カンタン・メイヤスー、レイ・ブラシエ、イアン・ハミルトン・グラントらの４人の初期メンバーによって2007年ロンドン大学ゴールドスミス校にて行われたワークショップをもって開始時点とするのが通例となっている。

このムーブメントは多方面に影響を与えたが、1990年代半ばから勃興し、2001年マウリッツォ・フェラーリスが『ニューリアリズム宣言』によって明確化した「新しい実在論（新実在論、新唯物論）」との合流も見せている。新しい実在論の論者としては『世界はなぜ存在しないのか』で脚光を浴びているマルクス・ガブリエルが挙げられる。これらの理論は互いに影響を与えながら、しかし異なる展開を見せている。

以下では代表的論者としてメイヤスー、ハーマン、ガブリエルの理論をそれぞれ概観しつつ、その理論的射程と芸術との関係性を探りたい。

２－１　相関主義批判

まず、思弁的実在論のバイブルとされている『有限性の後で』を見ていくことから始めたい。今日広く知られているように、メイヤスーはこの論考において、思弁的実在論―メイヤスーの言葉では思弁的唯物論―を展開し、思考の外部の存在の思考可能性についての議論を通して、カント以来の「相関主義」を批判した。

思弁的実在論に一貫して見られるのは相関主義批判である。そこでメイヤスーからの影響は「相関主義批判を出発点においてのみ共有すること」ないしは「非人間的なものへという大きな方向付け」にあると指摘されているように（千葉 2018b：298）、メイヤスーの議論の結論部分よりもそのプログラムが浸透しているという状況がある。

メイヤスーによれば相関主義とは「思考と存在の相関」

にのみアクセスでき、一方の項にのみアクセスすることはできないという相関の乗り越え不可能な性格を認めるという思考のあらゆる傾向のことをいう（メイヤスー 2016：15 － 16）。これによれば、素朴実在論であることを望まないあらゆる哲学は相関主義の一種になる。この点にメイヤスーの強硬な形式化もあるのだが、カント以降の近現代哲学をまとめて相関主義としてくくって批判してしまうことで、ポスト・ポスト構造主義的立場からの新たな哲学を示そうとするのである。

ここで相関主義的思考と美術との関係性について考えてみよう。それは相関主義批判がいかに美術に関わってくるかという点のポイントだからである。

美術作品はモノそれ自体としてではなく、制作者がモノとやりとりをする中でモノのモノ性を生かしつつも多様なイメージをそこに折りたたんでいくことで、幾重にも思考のレイヤーが積層されたことで事後的に生成するような存在である（小松 2018：第一部）。すなわち、美術作品は人間とモノや出来事の関係性が質的に編み込まれている間主観的な領野抜きに成り立つとは言いがたい。「何が芸術なのか」と問わずに「いつ芸術なのか」と問い、稠密な芸術の意味作用を考察したネルソン・グッドマンの記号主義によれば（グッドマン 2008）、芸術はその質的な記号作用をなくしては芸術ではなくなってしまう。同様に、ジャック・ランシエールによる芸術の三つの体制の区分における、美学＝感性論的な体制もまた、相関的なランガージュの中での芸術を語るものである。芸術諸実践を規定するポリス的ヒエラルキーの体系、言い換えれば「感性的なもののパルタージュ」からの切断の契機である「リアリズム」による「フィクション」の生成は、主体の有限性の前景化を通じた「世界制作」による主体の変容を含めた政治性を示している（ランシエール 2009）。

以上のように、美術において「相関的循環」から逃れることは困難であり、それはむしろ美術の感性的な性格によってより強調されてくるように思われる。このことが端的に示されているのはカントの『判断力批判』であろう。カントにおいて判断力は特殊を普遍のもとに包摂する能力であるが、これは特に美学的判断において判断の規定根拠が主観的なものでしかありえないにも拘わらず普遍を要求することでカントの三批判の体系を基礎づけるものであった。カントにおける美は否定神学的な性格をもつ「自己を無にする無」（アガンベン）といえるが、それは美的判断という契機に依存した反省的な概念である。これは美を「絶対精神」の顕現に見たヘーゲル、ロマン主義的美学観において徹底化されている。

こうした芸術あるいは美をめぐる言説は確かに、「大いなる外部」を失っているのかもしれない。それは先述したように関係性の美学における人間相互の関係が過剰に主題化されてしまっていたこととその反省の機運にも通じることであり、構造主義的、ポスト構造主義的思想・芸術以後に改めて「モノ」の実在性のレベルで思考することの可能性を問う必要があるという問題意識が出てきているのが、思弁的実在論と芸術との接点となっていると考えられる。

２－２　充足理由率の消去

メイヤスーは相関主義を原理的に批判するために「祖先以前的」なものはいかにして思考可能かということを問うた。これは端的に人間のいない、すなわち相関のない世界についていかにその存在を有意味なものとして認められるのかという問題である。この問いは実のところ、祖先以前的な言明だけに限定されるものではなく、思考と存在の時間的不一致（隔時性）において意味をもつような言明一般に関わるものであり、人類の出現以前だけでなく、人間の消滅以後に関わる言明も問題となる。よって、祖先以前性の問題は、「隔時的な言明一般が有意味であるための条件」を問うものなのである（メイヤスー 2016：188）。

メイヤスーの結論からいうとこの問題は、充足理由率の消去（偶然性の必然性）による数学的言説の絶対化によって解決される。メイヤスーによれば思弁的唯物論とは、「数学がもつ非―相関的な射程」を理解することが可能な思考の道とされるものである[2]。

充足理由率はあらゆる事物がほかならずそうであるための必然的理由をもつという原理だが、これは独断的形而上学を支える原理である。形而上学は理由率を介して絶対的なものへとアクセスできると主張するあらゆる思考をいうが、これは相関主義によって徹底的に批判されてきた。しかし、絶対的なものへとアクセスできるというあらゆる思考（「思弁的」といわれる）を否定してしまえば、思考の外部の思考は不可能になってしまう。そこで、メイヤスーは形而上学でない思弁、独断的でない絶対的なものについて立証しようとする。

メイヤスーはそのための論拠を相関主義の強いモデルにおける事実性を絶対化するということから導き出す。相関主義には弱いモデルと強いモデルがある。弱いモデルはカントに代表されるもので、物自体は認識不可能であるが思考可能であるとする立場である。この場合物自体の無矛盾律は否定されておらず、物自体は確かに存在する。強いモデルはハイデガー（現象学）とウィトゲンシュタイン（分析哲学）に代表されるもので、無矛盾律までを脱―絶対化し、あらゆる表象を相関的循環の限界（有限性）に従属させる。強い相関主義は、世界を直観でき、それについて言うことができる存在者なしに世界は思考できないという「相関項の第一次性」によって素朴実在論を否定し、一方で相関項、世界の構造をなすと想定される不変項それ自体の事実性を認めるという点で「主観的形而上学」（ライプニッツのモナド、ニーチェの「力への意志」、ドゥルーズの「生」に見られるような相関的なものを絶対化する動向）に対抗している。ここで事実性とは、思考は「存在するものはなぜ存在するのか」を明らかにできないという思考にとって本質的な不能性を示している。これは究極の理由の不在として「非理由」であり、あらゆる事物そして世界全体の実在的特性として考えられなければならない。いかなるものもそうであるように存在し、そのようであり続ける理由はなく、別様になりうるという偶然性の必然性（ハイパーカオス）こそが非理由率の絶対的真理であり、メイヤスーにおける絶対者である。

しかし、この偶然性が思考可能とされるためには弱い相関主義において客体化されること、すなわち無矛盾律と存在することの必然性が確認されなければならない。詳細な議論をここで追うことはできないが、その両者が非理由率から真であることが示され、カオスは数学的言明によってアクセス可能な対象であるとされるのである。

２－３　科学外フィクション

しかし、ここで問題となるのは偶然性によってあらゆるものが変化可能であると示された以上、現実の自然法則の安定性をどのように説明するのかということである。この問題はヒュームの問題の思弁的解決という方法で解消される。ヒュームの問題は、継起する出来事のあいだに観察される結合の実効的な必然性を証明できるか、というものである。この問題はグッドマンが「古くからの帰納法の問題」として提示したものでもあるが、ヒュームはそれを習慣の問題として、グッドマンは妥当な帰納法が妥当でない帰納法から擁護されるという問題へと変換することによってそれぞれ解消しようとした（グッドマン 1987：第３章－４章）。この両者の解消方法は、法則の必然性の存在論的な取り扱いが失敗であるという帰結によってそうした問いを破棄するように促すものであるが、メイヤスーはそれでもなお偶然性の必然性によって存在論的な道をとりうるのだと主張する。

メイヤスーはこのことを数学的解決以外でフィクションという文学的な見地からも論じており、芸術との関連からここではそちらを見ていこう[3]。そこでは二つのフィクションの体制が区別されており、一方はサイエンスフィクション（science-fiction, SF）、もう一方は「科学外（世界の）フィクション（fiction（des mondes）hors-science, FHS）」である。FHS が可能であるということは、ここではヒュームの問題の思弁的解決に相当するものである。

ここで SF とは科学が依然として成立する世界のフィクションである。FHS とは実験科学が原理的に不可能な世界のフィクションであり、真にヒュームの問題の仮説に従ったフィクションである。ヒュームの問題は、ポパーがそれを SF 的に反証可能性の問題とみなしたのとは違い、科学そのものが不可能になった世界についての仮説である。

このような世界は法則でさえも偶然に突然変わりうるものとしてあるとされるが、非理由率に従うならば、事実論性に基づくこの世界でさえも不確定なカオスとして語りうる。カントはポパーとは違い、ヒュームの問題の本質をとらえたうえで、今ある現実がこのように表象されるということの事実でもって背理法的にヒュームへ応答する。つまりカントに従えば、あらゆる法則が崩壊した世界では世界の表象や思考それ自体も消滅し、何かと何かの区別すらももはや存在しないのだが、現実はそうではない以上、何らかの法則に従っているということである。

しかし、カントのいうように、法則なき世界が直ちに激烈に不安定であるとはいえないとして、メイヤスーはカントが確率論的に自然法則の安定性を考えていると批判する。「超越論的演繹の弱点は、FHS 的想像の不十分な実践に由来する」（メイヤスー 2018：124）。メイヤスーによれば、その不規則性が科学を無効にするには十分だが、意識を無効にするには不十分であるような世界―真の科学外世界を考察することは可能であり、ここにおいて FHS は可能になる。FHS の典型的作品としてはルネ・バルジャヴェルの小説『荒廃』が挙げられており、そこでは突如として電気がなくなった世界についての出来事が、何の説明も与えられないままひたすらに叙述されていく。

しかしながら、FHS は難しい企てであり、SF に何らかの形で常に回収される可能性がある。『荒廃』においてもそこでは電気を含め様々な事実をもとにして考えられており、そうならないために完全な恣意性に基づけば、それはランダムな羅列からなるナンセンスな文字列になりかねず、そのような不安定さは作品から作品であることの条件を失わせるかもしれない。しかし、メイヤスーは FHS に対して可能性を見ている。「窒息するほどまでに推し進められる形相変化、経験＝実験不可能な世界における自我の経験。脆弱な強度は、その純粋な孤独に果てなく沈潜し、瓦礫の山以外のいかなる環境もないそこで、世界なき存在の真実を探求するでしょう」（同上：144）。

２－４　メイヤスーにおける芸術の位置

以上に見てきたように思弁的実在論の立場から芸術を考える場合には相関の外部としてのモノに着目するような立場と、FHS をつくり出そうとする立場があることが分かる。両者に共通しているのはその思弁的性格であるが、その場合、人間的なものを徹底的に無化する方向に向かいつつ、不可能なものとしての外部を「哲学的に」絶滅させるという「ラディカルな有限性」（千葉 2018a）という性格をもつものであるといえるだろう。また、思弁的実在論には「無関係性の哲学」という側面があり、切断や無関係といった現代的な欲望を表す現代における一種の文化表象として考えられるといわれており、このような筋でも探求の可能性がある（千葉 2018b）。

メイヤスーにおいて、FHS であっても意識は存在する世界でなければならなかったように、あくまで思弁という人間的な契機は捨てていないということにも着目する必要がある。また、メイヤスーにおける身体が認識の「前―超越論的条件」（メイヤスー 2016：47）とされていることも確認しておきたい。芸術における思弁的実在論とは、実在への数学的なアクセスではない、芸術によるアクセスを目指す一種の思弁であるということができるだろう。

２－５　オブジェクト指向存在論

思弁的実在論の非人間への指向をオブジェクト[4]どうしの無関係性という形で先鋭化させていくのがハーマンである。メイヤスーにおいては、人間は思弁的に物自体にアクセス可能であるということ、思弁という人間的事象の意義を認めるという二点が保持されていた。しかし、オブジェクト指向存在論では、物自体は永遠に把握不可能にとどまり、人間のみならずあらゆるオブジェクトは互いにアクセスすることは不可能であるということから、思弁的な人間的事象すらももはや哲学の中心ではない。

ハーマンはアリストテレス、スコラ学派、ライプニッツらの系譜にある実体の哲学がオブジェクト指向存在論の先駆けであるとみなしており、一般に反オブジェクト指向として考えられる諸哲学に反抗することを試みる。ハーマンにおけるオブジェクトは「まとまりをなしたさまざまなもの」であり、メロンや銅山、軍隊やドラゴンなどといったあらゆる日常的に経験する世界の断片である[5]。このような素朴な次元での現れをハーマンは重要視する。ハーマンはこうしたオブジェクトを真理であるには浅すぎるものとして微細な要素的断片や全体的な一者によって解体しようとする試みを「下方解体」といい、逆にオブジェクトを不

当に深淵化して、それが関係性や知覚される性質の束として現れる場合のみが重要であると「理却」することを「上方解体」としてその両者を批判する。そして、存在論的単位としてのオブジェクトを中心として、それらの相互作用を考えることがオブジェクト指向存在論である。

ハーマンは現象学、特にフッサールとハイデガーに依拠して理論を構築している。フッサールの志向的対象から導き出したのが「感覚的オブジェクト」である。これはあらゆるオブジェクトの内部にあるものとして考えられており、そこでは感覚的性質との緊張関係におかれているとされる。ハイデガー、その特に道具分析からは、互いに「退隠」しており相互に触れ得ない「実在的オブジェクト」とそれに対応する実在的性質を導き出している。この実在的―感覚的における４項からなる世界がオブジェクト指向存在論の基本構造である「四方界[6]」である。

四方界における構成要素の緊張関係によってあらゆるものを説明しようとするのがオブジェクト指向存在論だが、ハーマンにおいて最も重要なのは、個々のオブジェクトは互いに退隠しており決して相互に触れ合うことなく、しかしその内部において相互作用するということである。ここにおいてハーマンはメイヤスーと袂を分かつ。ハーマンにおいて物自体は間接的にしかアクセス不可能なものである。すなわちあらゆる実在的オブジェクトは、感覚的な内部を通じて関係しており、このつながりは通常の因果関係と区別して「代替因果」と呼ばれている。人間も木も石も同様に感覚的な次元で関係している。このように考えるがゆえにハーマンの理論は汎心論（多心論）的なものとなる。

それゆえハーマンにとって感覚的領野はあらゆるオブジェクトに共通の根本的に重要なものである。そのため「第一哲学としての美学」というテーゼが示しているように、美学が存在論の基礎をなすものとして重要視されるのである[7]。注意しなければならないのは、ここでいう美学というのは人間的な意味がそこにかすかに感じられるとしても、決して人間的なものではなく、オブジェクト間の関係の構造を指しているということである。例えば星野が検討を加えた「魅惑」という代替因果は、ハーマンによれば感覚的性質と実在的オブジェクトとのアドホックな関係を指すが、これは芸術理論と結びつけて考えることもできるのだとしても、むしろ因果関係一般についての理論と見なければならない。

四方界における項のあいだの関係はそれぞれ10の関係に大別できるとされており、そのすべての詳細な検討はここでは加えられないものの、魅惑や暗示を含め、検討されなければならない関係が多く残されている。特に実在的オブジェクトと感覚的オブジェクトの関係である「真率（sincere）」は間接的なアクセスしかありえないとされているオブジェクト間の関係において唯一直接的な関係であるといわれており、「真率が終焉を迎えるとき、その出来事を経験する媒介は存在しない、そしてそれゆえに、それは端的に宇宙から消滅する。真率の証人となる媒介は存在しない」とまでいわれている（ハーマン 2017：210）。この真率が保証されているということがハーマンの理論における要石であろう。なぜならハーマンが言うオブジェクトはすべて真率によって保たれているからである。しかしながら、ハーマン自身がなぜ真率が成り立つかについては問いを開いたままにしているように、このことについては明らかではない[8]。

ハーマンは美学を第一哲学にしていることからも分かるように、芸術論も積極的に著している。例えば、「無関係なアート」というエッセイでは、実在的―感覚的という対を、クレメント・グリーンバーグのフラットな表面の「深さ」とマイケル・フリードの演劇性における「表面性」にそれぞれなぞらえながら、その一方に限定するような立場を批判している[9]。ハーマンによってグリーンバーグと結びつけて考えられるハイデガーは『芸術作品の根源』において退隠する大地とアクセス可能な世界の争いを語っているが、そこでは存在というものが過度に全体的なものとしてとらえられていた。ハイデガーの大地はグリーンバーグの表面と対応する。それらは表面でありながらあまりにも深いものとして考えられている。一方フリードはグリーンバーグの表面をリテラルなものとして誤解し、表面のスペクタクルに置き換えて、それを批判する。リテラルなものは演劇性と等しく、それらは観客とコンテクストをつくり出す。ハーマンによれば、ここで言われるリテラルなものは関係性でもあるが、同時に演劇は観察の場というよりミメーシスによって演者になる場である。ハーマンは美術作品における深さと演劇性の双方を擁護し、それらが示されているとして Grisha Bruskin や M.C.Escher を例示している。ここで示そうとしたのは、R.Tiravanija のような関係性に回収されない無関係性、作品の孤立性である。これはしかし、人間的な側面からではなく、ハーマン美学の観点からとらえられる必要があるだろう。

ハーマンはここでブリオーの『関係性の美学』にも言及し、同時にデリダやドゥルーズ、ラトゥールらも関係の哲学として示したうえで、無関係性のアートによってそれらを批判しようとした。ブリオーもまた台北ビエンナーレのステートメントで、思弁的実在論やオブジェクト指向存在論の影響が大きなものになりつつあること、それらと自らの思考の共振する部分があることを認めていた。しかし2018年度に東京藝術大学で行われた講演会に即したインタビュー（ブリオー 2018）において、ブリオーはそれらに対して批判的に応答している。まず、ブリオーはメイヤスーとハーマンをはっきりと区別し、メイヤスーにより理論的な親近性を見ている。これは人間の存在を抜きにして美術を考えることがナンセンスであるためであり、メイヤスーは複雑な形であれ、人間的な契機を認めるからである。一方のハーマンに対しては「美術を非人間的なレベルで扱おうとしていて、私にはそれがまさに感傷的で人工的なものに見えるのです」と述べ、「メイヤスーははるかに繊細な仕方でオブジェクト指向存在論のことを話しています」と続けている。ブリオー自身はアルチュセールの歴史理論を用いて思弁的実在論を批判することを試みており、思弁的実在論が「人間と非人間という対立をシステマティックに立てている点で、あまりにも二元論的」であるとしたうえで、「哲学における21世紀の主要な任務とは、二元論や独断論とは異なる仕方で、唯物論を発明しなおすことではないでしょうか」と述べ、ポスト思弁的実在論における哲学・アートのあり方について繊細で複雑な実在への関わりの必要性を模索している。

２－６　意味の場の存在論

以上に見てきたように、メイヤスーやハーマンらの動向は広範囲に影響を与えながらも批判的に捉えなおされる段階にすでに至っている。思弁的実在論は2010年前後にブームを迎え、それ以後は引き潮になったといわれている（千葉 2018b）。今日的な実在論の練り直しは思弁的実在論の問題構制を部分的に引き継ぎながらも、新たな展開を見せていると考えられる。

そうした動向の代表的論者とみなされているのは、『世界はなぜ存在しないのか』がベストセラーとなり、2018年６月に来日講演も行っているマルクス・ガブリエルであろう。ガブリエルはメイヤスーの議論を部分的に継承しながらも、「偶然性の必然性」という絶対的なものを提示し科学主義的イデオロギーに接近するメイヤスーに対して明確に批判的な立場をとっている。ガブリエルは「必然性の偶然性」を擁護して、有限性の後の立場をとることはできないという主張を、ドイツ観念論、特にシェリングの「神話」概念に依拠しながら示していく。

「どのような観点から見ても主体が存在することなしに生じる宇宙の秩序を記述しようとしている点で、メイヤスーは批判されるべきなのです」（ガブリエル・ジジェク 2015:11）。ガブリエルによればポスト･カント的観念論は、メイヤスーがそれを相関主義として批判したような神話的ドグマに陥っているのではなく、むしろ主体の反省における神話の不可欠性を共有している。

カントは確かに主観と客観を分離し、主観の側から客観を定義した。このことによって「超越論的詐取」という判断と実在の混同を批判したのである。カントにおいて世界は「論理的自我」による判断という総合的活動の結果に過ぎないのだが、世界の構成的原理自体は経験されることができない。ヘーゲルはカントのこのような仮象性をより徹底させ、物自体、すなわち「ヌーメナルなもの」を「彼岸を崩壊させることによって自律性を打ち立てる活動」である「反省」によって現象へと回収した（同上：79）。ヘーゲルにおいて存在は「絶対的仮象」であり、それゆえ自己言及的な「本質の反省」という絶対的否定性においてある。つまり主体の実体は主体の自己構成の過程によって遡及的にのみ措定される。このように精神が啓示することの構造は、或るものを啓示するのではなく啓示することこそが精神の規定性であり、内容である。それゆえ「主体性は存在論的生成の根源的審級」であり、「主体性とは主体性が自己を措定するということ、意味の場、つまりこの意味で住まわれるべき世界を生み出すことに他ならない」（同上：82）。

しかし、ヘーゲルは存在と反省の同一化を楽観視しすぎていた。ヘーゲルにおいて反省に先行する存在はなく、思考以前の存在は「絶対的必然性」を示す概念そのものである。反省によって主体は「論理空間」にアクセスすることができ、そのことで存在を経験することができるのだが、これが可能になるのはシェリングのいうような「神話創造」という様態のもとにおいてだけなのだ。

規定性が自己言及的なものであるがゆえに記述は幾重に重ねても偶然性を排除できず、高階の反省は原理的に無限に続けられてしまう。そのため必然的なものである規定性は常に偶然的なものに依存する。ヘーゲルの論理主義は何らかの前論理的現象に適応できず、神話をアレゴリーによって説明せざるをえない。しかしシェリングによれば、「ロゴス」の領域の内部には「捕らえがたさの経験」によって動機づけられた「自己疎外という論理的行為に還元されることなしには完全に透明になりえない現象が存在する」（同上：116）。このような「自分自身と等しくないもの」における不整合性は、論理空間と「等―根源的」であり「基礎づけの無根拠性」に貫かれている。ヘーゲルとは異なり、シェリングにおいて存在は規定的存在に解消されない。偶然性はそれ自体偶然的であり、純粋な事実性は「無底」なのである。

シェリングにおいて神話は無底の先行性から存在の意味の全き統一、内容と形式の全き統一を成立させる、「存在論的生成」である。言語が神話を可能にするのではなく、神話が言語を可能にする。これが、主体の理論における神話の不可欠性であり、主体は「構成的神話」として「我々が限界づけられた対象領域と相互作用をすることを許すような確実性の集合を定義することによって、理性の空間を開く」のである（同上：128）。ガブリエルはこのような神話概念に基づき、「神話学についての神話学」を提唱する。これは論理階梯理論に依拠するものであり、一元論と懐疑論との間の中立的な立場から、規定性の諸公理を無規定な神話として考察する。これは倫理的な決定であり、我々の生は実存的に、「無条件的なものを対象化するという仕方で、我々が住まう世界の中で、またそうした世界として自らを表現している」のである（同上：145）。

ガブリエルはこのような神話の「必然性の偶然性」、言い換えれば「世界の多数性」を認めることが、民主主義における政治の概念について重要だと考え、「平等という前提」というランシエールの主張に同意する（同上：157）。それゆえ、絶対者を「物化」する独断論や科学主義を批判するのであり、メイヤスーが「偶然性の必然性」という形で絶対者を導入することも批判する。シェリングの神話概念は、「偶然性の必然性」さえも含むような偶然性である[10]。それはメイヤスーが思弁、言説を通して必然性を示しえたという有限性に端的に現れているのだ。そして、あらゆる神話を包摂するような神話（世界）は原理的に存在しえないとして、ガブリエルは「世界は存在しない」という主張に至るのである。

ガブリエルは以上のような観念論の理解をもとにして、独自の「新しい実在論」を提唱する。ここで神話は「対象領域」と呼び変えられ、世界は「すべての対象領域を包摂する対象領域」であると定義される（ガブリエル 2018b：55）。この対象領域は、「意味の場」であるとされ、「何かが意味の場に現れている状態」が何かが存在するということである。「存在―論理的性質」（ガブリエル 2018a：144）であると考えるガブリエルは、「秩序立ての規則」あるいは「対象が現象する仕方」を「意味」と呼ぶ[11]。ここで、およそ存在するということは意味の場に現象することであり、これがガブリエルのいう「意味の場の存在論」である。この意味の場は無限に入れ子構造になっており（フラクタル存在論）、唯一の世界以外のあらゆるものが存在するとみなされる。そのため、「わたしたちの生きている世界は、意味の場から意味の場への絶え間ない移行、それもほかに

替えのきかない一回的な移行の動き、さまざまな意味の場の融合や入れ子構造として理解」できるのである（ガブリエル 2018b：142）。

このような「存在論的多元主義」の立場はグッドマンが「ヴァージョンの複数性」といったことと共鳴している（グッドマン 2008）。あるいはパラダイム論や構造主義との関連も問うことができるように、主張自体は奇抜なものではない。特徴的なのは意味という精神的なものを実在論の基本要素に据えたことであろう。このことは見てきたように思弁的実在論への原理的批判を含んでおり、この立場によればハーマンにおけるオブジェクトも意味の場によって説明されることになる。他ならぬハーマンが芸術を語る際に、退隠だけでは語りえないように[12]。

ガブリエルは「芸術の意味は、わたしたちを意味に直面させること」にあるという（ガブリエル 2018b：245）。通常われわれは対象を見ているのだが、造形芸術においては対象の見え方それ自体が可視化される。加えてフレーゲが「照らされ方」ないし「着色のされ方」と表現している領域までが意味として現象する。これら多様な意味の現れ、意味の両価値性に芸術はわれわれを親しませ、「対象を解放する」。これらの意味はしかし客観的なものとしてそのそれぞれが対象化される。こうした意味は、対象の一階の存在に関わるだけでなく、反省的な高階の無限な意味の連関において考えられるということからわかるように、「およそ芸術作品は反省的な意味の場」にほかならない（同上：264）のである。「我々は、〈我々自身ここに存在すること〉に向き合うために、表現の有限性と、あらゆる枠組みが持つ抹消できない偶然性を承認する必要がある」（ガブリエル・ジジェク 2015：177）。芸術は改めて人間の有限性にわれわれを直面させ、思考―「自らの内部における存在の折り重なり」（同上:16 － 17）への反省を促すのである。（橋本）

３．行為体の実在論（Agential realism）と芸術的省察による研究（Arts-Based Research）

見てきたように、相関主義を批判する思弁的実在論や新しい実在論において、芸術を主題化するためには意味の場に直面する人間の精神を再び導入することになる。しかしそれは人間中心主義に回帰することではない。新たに展開している唯物論や実在論の議論を経ることによって、わたしたちはどのような美術の探究を展望しうるのか。簡単な問いではない。ここでは美術教育研究としてわたしたちが着目している芸術的省察による研究（Arts-Based Research）と新しい唯物論とを重ねて考えようとしている J. ロジエクの論文に依拠したい。

芸術的省察による研究（Arts-Based Research：以下 ABR と略記）とは、芸術制作過程における探究を知の構築と主体形成とを同時に可能にする研究と捉えるものである[13]。ロジエクは、ABR が人間の良き生（well-being）にいかに貢献するかという意味での倫理を考えようとする。

ロジエクによれば、ABR の倫理として一般に考えられているのは以下の３点であるがそれぞれ限界を抱えているという。第一に、ABR は隠されていて他の方法ではアクセスできない現実の側面を描写できる（素朴な経験主義）。第二に、ABR はイデオロギー的に抑圧されている現実の側面を感情を伴って描き出すことで世界を開示するだけでなく、その変革を促す（批判理論）。第三に、ABR は社会過程に関するわたしたちの理解を枠づけている権威を問題化する（ポスト構造主義・ポストモダン）（Rosiek 2018：633 － 635）。新しい唯物論からすると、これら３つの探究理論は、「意味構築における行為主体をすべて人間活動に置いている」として批判される（ibid：637）。そのような限界を乗り越えるものとしてロジエクがここで依拠するのは、カレン・バラードの「行為体の実在論（agential realism）」である[14]。

「行為体の実在論」とは、世界を言葉とモノに存在論的に切り分ける表象主義（representationalism）に代えて（Barad 2003：811）、とりわけ「ポスト人間主義的（posthumanist）」な遂行性（performativity）（ibid：808）のなかで実在が立ち上がってくると考えるものである。すなわち、あらかじめ行為者を前提する相互作用（interaction）ではなく、探究する行為者と探究の対象双方が、「内部－作用（intra-action）」において現象の構成要素として成立してくる（ibid：815）[15]。それゆえここで言うエージェンシーとは、意識や意図をもつ行為主体というよりも、「絡み合い（entanglements）を再編成する可能性」それ自体を指す[16]（Rosiek 2018：639）。

ロジエクは、ここに ABR との共通点を見る。研究するわたしたち自身が、研究している主題やモノに浸透し結びつけられている。それゆえに確定的な認識ではなく、常に動きつづける生成の関係において探究するなかで、研究者自身が構成される（ibid）。ABR はこのように、制作者自身が制作行為のただ中で作品を探究しつつ自己変容を遂げていく研究のあり方である。バラードは自らの研究について次のように言う。「私がこの本を書いたというよりも、それが私を書いた（it has written me）。あるいはむしろ「わたしたち」が「内部－作用的に」互いを書いた」（Barad, 2007：ix-x）。作者としてのエージェンシーが個人に内在するのではなく、むしろ書かれつつある作品が私において表れることが書くことであるという、このようなバラードの姿勢は、「つくり手は、つくる過程を超越的な位置から能動的に支配するのではなく、過程の中動の中に巻き込まれている」（森田 2013：192）とする、芸術制作における中動態に近しい[17]。

エージェンシーという視点を入れることは、新しい実在論などが批判する相関主義に再び戻ることなのだろうか。認識主体それ自体が、探究のなかで構成されるとするバラードの議論は、認識主体を前提してそれとの関係で事象を成立させる相関主義と相容れないことは明らかだろう。しかも、この構成は主体と事物の相関のなかでというよりも、継続的な世界の（再）配置による[18]（Barad 2003：818）。ここで重要なのは、何をエージェントを見るかということ以上に、エージェンシーという作用それ自体である。バラードによれば、世界は「進行しつつある再編成における内部－作用性のダイナミックな過程」である（ibid：817）。世界を再編成するこのダイナミズムこそエージェンシーなのである（ibid：818）。

相関主義を批判して出てきた唯物論や実在論は、人間のモノへの働きかけとは異なる世界形成のありようを示す。

それは世界にいて思考する人間はその世界の外側に出ることはできず、内側から探究するしかないこと、しかもその探究のただ中で自らも生成変容するということである[19]。このような思考こそ、T. インゴルドが「アートに従事する人たち」の実践に見た「探究の技術」であろう[20]。相関主義と実在論との対立において美術の探究をどう位置づけるのか、これについて考えるには、新しい実在論の批判の対象であったカントの議論も含めてまだまだ論じられなければならないことが多く残されている。別稿で論じたい。（小松）

註

1 こうした思想動向と連動して、教育学においてもモノを主題化した研究がなされている（今井 2018）。

2 メイヤスーはここでバディウに倣ってカントールの無限集合論を存在論的に応用するということを試行するが、問いの解決の方向性が示唆されただけである。この最終的な数学主義に加えて、偶然性の必然性の議論は『有限性の後で』では触れられていない「来るべき神」の復活という構想に結びついているといわれており、いずれにも疑問が残る部分である。思弁的実在論の論者もメイヤスーの結論自体は留保し、相関主義批判と充足理由率の消去という二点を主な論点とみなし、それぞれの理論を展開している。

3 メイヤスー「形而上学と科学外世界のフィクション」『亡霊のジレンマ』所収。この問題を取り扱ったものとして、佐々木敦「エレクトロ＝サイエンスフィクションは可能か？」『現代思想』第 44 巻第 1 号 2016 がある。

4 オブジェクトは通常は対象と訳されるものだが、ハーマンの特異な用語法からオブジェクトという表記が用いられることが多い。ここでは星野 2015 に倣っている。

5 星野によればハーマンにおけるオブジェクトの定義とは「この世界のいかなる関係からも隔絶した無限の〈何か〉」である（星野 2015：134）。これらは「真空」という絶対的な孤立の中に存在しているのだが、その内側に「感覚的エレメント」が満ち満ちており、個々のオブジェクトは内部においてのみ相互作用しうる。

6 これはハイデッガーが「有るといえるものへの観入」で示した「大地・天空・神々・死すべき者ども」のことであり、ハーマンはこの 4 項関係を借りて、二元論の変形のような四元論を構築する（ハーマン 2017：第６章）。

7 星野 2015 参照。

8 一つの解釈としては、真率を現象学的なあらわれの事実性であるとみなすのならば、この点についてはメイヤスー的な非理由率からの批判が加えられるだろう。さらに、ハーマンの言うオブジェクトは非人間的で孤立的ではあるがその議論は一種の相関主義なのではないかという疑問も生じる。こうした疑問に対して「眠れるオブジェクト」あるいは「夢見るオブジェクト」というような永遠に自らの真率にしか関わらないような「世界を素通りする」オブジェクトも考察されているが（ハーマン 2018a：123）、こうした孤立はハイデガー的な語りと相まって、かえって一種のポエジーに埋没してしまいはしないだろうかという疑問は残る。

9 Harman2014 参照。

10 ガブリエルはシェリングに依拠しながら次のように示している。「思考以前の〈存在〉の必然性、すなわち必然的存在者の必然性そのものは、偶然的である。なぜなら、それはなんらか偶然的なものの現実存在に依拠しているからである。必然的存在者の必然性は、偶然性が設えられた後でのみ、確かめられうる。」（ガブリエル・ジジェク 2015：111）

11 ここでの意味（Sinn）とは指示対象ではなく、フレーゲのいう「意義」であることに注意しなければならない。ガブリエルはフレーゲに依拠しているのだが、通常フレーゲの用語の訳出では Sinn が意義であり対象の与えられ方を指し、Bedeutung が意味であり指示対象を指す。フレーゲの用語法についてはフレーゲ 1999 参照。

12 「退隠は、自分自身が生じるために対象化を前提とするのである」（ガブリエル・ジジェク 2015：146）。

13 小松 2018 参照。

14 バラードは、ニールス・ボーアの量子力学に依拠して、「諸々の表象と、表象される諸対象の区分を前提とする」表象主義を批判する。その枠組みは「科学論における実在論的潮流」と「ポスト構造主義思想のテクスト主義的、社会構成主義的読解に対する反発としての唯物論的方向」という二つの方向性をもつとされる（小川 2017：92）。小川はバラードのエージェンシャル・リアリズムが「新しい唯物論」に共鳴するものであるとしつつも、ドゥルーズに依拠するデランダの新しい唯物論やメイヤスーの思弁的実在論とは異なり、科学論の流れを汲むアクターネットワークセオリーとフーコー、デリダのようなテクスト主義とを組み合わせつつポスト人間主義的フェミニズム理論を展開しているとしている（同上：96）。それゆえ後註に示すように、バラードの議論は実在論ではないと言われるが、それが美術の探究と親和的だとすると、そこから逆に美術の探究の特徴が見えてくる。

15 バラードの著作のタイトル『世界に途上で出会う』というのは、途上において出会うことで世界と自己とがともに生成してくる状態を示していよう。

16 ハーマンは「新しい唯物論」（Barad, 2007）に言及して、「熱狂的と言っていいほどに反実在論的な運動である」ことから実在論の動向には含めない見解を示している（ハーマン 2018b：126）。バラードの立場は、ハーマンから見ればオブジェクトの退隠を理解していないように映るのかもしれないが、エージェンシーの実在性の対象化は、探求の中で語るという有限性への再帰的直面としての ABR における、存在論的生成の場を開くものだといえないだろうか（橋本）。

17 中動態とは、動作主が動作に巻き込まれるような状態を示す動詞の態である。

18 D. アトキンソンは、バラードの理論を美術教育の議論

に援用して、例えば描画を通した実体的な学習実践を、このような世界の（再）配置とつなげる（Atkinson, 2017：32）。ただしアトキンソンは、バラードの「内部－作用」の生成力を認めつつも、「関係的還元主義」に陥りかねない点を危惧し、ホワイトヘッドに依拠したサヴランスキー（Savransky, 2016）の言う「実在存在の「堅固な事実」」に着目する（Atkinson, 2017：208）。ここでもバラードの理論は反実在論的なものとみられている。

[19] 「わたしたちは、世界に外在する観察者ではない。かといって、わたしたちは単に世界の中で特定の場所を占めているわけでもない。；むしろわたしたちは世界の一部であり、その世界の進行中の内部－作用性（ongoing intra-activity）のただ中にいる」（Barad：2003：828）。

[20] 「探究の技術において、思考は、わたしたちがともに働く物質の流れやその変動に絶えず応答しながら、それらとともに進行するように振るまう」「探究の技術はリアルタイムで前に進んでいく。次に何が起きるのかを見るために、自分の手が触れるものの生に随伴されて、両者が属する世界を巻き込みながら物事を試すのだ」（インゴルド　2017：26－27）。

参考文献

Atkinson, D., *Art, Disobedience, and Ethics: The Adventure of Pedagogy*, Palgrave Macmillan, 2017

Barad, K., Posthumanist Performativity: Toward and Understanding of How Matter Comes to Matter, *Journal of Women in Culture and Society*, vol. 28, no.3, 2003

Barad, K., *Meeting the Universe Halfway: Quantum physics and the entanglement of matter and meaning*, Duke University Press, 2007

Bishop, C., Antagonisms and Relational Aesthetics, *October*, Issue 110, 2004, 星野太訳「敵対と関係性の美学」『表象』第５号 2011

Bourriaud, N., *Relational aesthetics*, Press du réel, 2002

Bourriaud, N., Notes for “The Great Acceleration”（Taipei Biennial 2014）, *Seismopolite, Journal of Arts and Politics*, http://www.seismopolite.com/nicolas-bourriaud-notes-for-the-great-acceleration-taipei-biennial-september-13-january-4（最終アクセス 2018 年７月 10 日）

ブリオー , N.「実践と理論のあいだ」『ART iT』インタビュー / 星野太 2018, https://www.art-it.asia/top/admin_ed_feature/182618（最終アクセス 2018 年８月２日）

千葉雅也・岡崎隆佑（聞き手）「思弁的実在論と新しい唯物論」『現代思想』第 43 巻第１号　青土社 2015

千葉雅也「ラディカルな有限性」『現代思想』第 46 巻第１号　青土社 2018a

千葉雅也『思弁的実在論と現代について』青土社 2018b

フレーゲ , G.『フレーゲ著作集４哲学論集』勁草書房 1999

ガブリエル , M・ジジェク , S.『神話・狂気・哄笑』堀之内出版 2015

ガブリエル , M.「中立的な実在論」『現代思想』第 44 巻第１号　青土社 2016

ガブリエル , M.「非自然主義的実在論のために」『現代思想』第 46 巻第１号　青土社 2018a

ガブリエル , M.『なぜ世界は存在しないのか』講談社 2018b

グッドマン , N.『事実・虚構・予言』勁草書房 1987

グッドマン , N.『世界制作の方法』筑摩書房 2008

Harman, G. Art Without Relations, *Art Review*, 2014 https://artreview.com/features/september_2014_graham_harman_relations/（最終アクセス 2018 年８月３日）

ハーマン , G.『四方対象』人文書院 2017

ハーマン , G.「オブジェクトへの道」『現代思想』第 46 巻第１号　青土社 2018a

ハーマン , G.「大陸実在論の未来」『現代思想』第 46 巻第３号　青土社 2018b

Helguera, P. *Education for socially engaged art : A materials and techniques handbook*, Jorge Pinto Books, 2011

藤田直哉「前衛のゾンビたち－地域アートの諸問題」藤田直哉編著『地域アート－美学／制度／日本』堀之内出版 2016

星野太「第一哲学としての美学－グレアム・ハーマンの存在論」『現代思想』第 43 巻第１号　青土社 2015

星野太「ニコラ･ブリオー　思想家としてのキュレーター」2018 年１月４日東京藝術大学講演会レジュメ

今井康雄『教育空間におけるモノとメディア－その経験的･歴史的・理論的研究』科研費研究成果報告書 2018

インゴルド , T.『メイキング』左右社 2017

カント , I.『判断力批判　上』岩波書店 1964

小松佳代子編著『美術教育の可能性－作品制作と芸術的省察』勁草書房 2018

熊倉純子監修『アートプロジェクト－芸術と協創する社会』水曜社 2014

桑田学「人新世と気候工学」『現代思想』第 45 巻第 22 号　青土社 2017

メイヤスー , Q.『有限性の後で』人文書院 2016

メイヤスー , Q.『亡霊のジレンマ』青土社 2018

森田亜紀『芸術の中動態－受容／制作の基層』萌書房 2013

毛利嘉孝「プロジェクト FUKUSHIMA ！－３.11 以降の芸術」熊倉純子監修『アートプロジェクト－芸術と協創する社会』水曜社 2014

小川歩人「書評 Karen Michelle Barad, *Meeting The Universe Halfway: Quantum Physics and The Entanglement of Matter and Meaning*」『共生学ジャーナル』第１号 2017

Rancière, J. *Le spectateur émancipé*, La Fabrique, 2008, 梶田裕訳『解放された観客』法政大学出版局 2013

ランシエール , J.『感性的なもののパルタージュ』法政大学出版 2009

Rosiek, J., Art, Agency, and Ethics in Research: How the New Materialisms Will Require and Transform Arts-Based Research, in; Leavy, P. ed., *Handbook of Arts-Based Research*, Guilford Press, 2018

Savransky, M., Modes of Mattering: Barad, Whitehead, and Societies, *Rhizomes: Cultural Studies in Emerging Knowledge*, Issue30, 2016

付記：本研究は JSPS 科研費 18H00622 による研究の一部である。